

新聞4コマ漫画が描く麻生太郎首相(前編)

首相在任期間中の3大紙の4コマ漫画に関する一分析 2008～2009

Prime Minister Taro Aso in Newspaper Comic Strips (Part 1):

An Analysis of Comic Strips in the Three Major National Newspapers in Japan 2008-2009

水野 剛也・福田 朋実

Takeya Mizuno, Tomomi Fukuda,

木野村樹里・志賀 俊之

Juri Kinomura, Toshiyuki Shiga,

菅原 想・千田 一輝

Omoi Sugawara, Kazuki Chida

申し訳ないけど、民主党代表の鳩山由紀夫さんよりは、麻生太郎さんにこのまま続けてもらった方が漫画を描くにはありがたい。

やくみつる(漫画家)⁽¹⁾

はじめに(本論文の概要)

本論文は、麻生太郎首相の在任期間中(2008年9月24日～2009年9月16日)に3大全国紙(『毎日新聞』・『読売新聞』・『朝日新聞』)の社会面に掲載されたすべての4コマ漫画(朝刊・夕刊とも)を精査し、そのなかから首相を描いている作品を網羅的に抽出し、それらが首相をどのように描いているかを主に質的に分析する試みである。

本号に掲載する前編では、論文の目的・方法・意義・構成を説明した上で、量的な側面から全体像を俯瞰する。

首相を描いた作品の質的分析は、本誌次号(第49巻・第1号)に掲載する予定の中編から開始する。中編では、『毎日新聞』の「アサッテ君」(朝刊)と「ウチの場合は」(夕刊)そして『読売新聞』の「コボちゃん」(朝刊)を扱う。さらにその次の号(第49巻・第2号)に掲載する予定の後編では、『朝日新聞』の「ののちゃん」(朝刊)と「地球防衛家のヒトビト」(夕刊)を同じ方法で分析した上で、結論として分析・知見を総括し、今後の研究課題や全体を通して得られる考察を提示する。

1 本論文の目的・方法・意義、および構成

政治・政治家を論評する上で、漫画は古くから主要な表現手段でありつづけてきた。政治漫画研究者の茨木正治によれば、政治漫画の嚆矢は、少なくとも15世紀末から16世紀のイギリスで発行された、宗教改革に関する1枚のパンフレットにさかのぼるといえる。⁽²⁾

政治漫画は、そのときどきの政情を題材とするため時事性が強く、それゆえ日々の出来事を報道する新聞とともに発展してきた。たとえば、アメリカでは植民地時代から現在まで、程度の差はあれ、政治漫画は新聞報道に不可欠な要素でありつづけている。アメリカのジャーナリズム界でもっとも権威があるとされるピューリッツァー賞には、早くも1922年に政治風刺漫画(Editorial

Cartooning) 部門が設けられ、同部門は21世紀に入っても存続している。日本でも、新聞が生まれた幕末の黎明期から現在にいたるまで、新聞紙面のなかで漫画はつねに一定の地位を占めてきた。時代や国を越えて、政治・政治家と漫画、そして新聞は切っても切れない密接な関係にある。⁽³⁾

ところで、世界的に見ても独自性が強い日本の新聞4コマ漫画は、政治・政治家をどのように描いているのであろうか？ 上述のとおり、日本の新聞も創成期から積極的に漫画を掲載してきたが、なかでも4コマ漫画は他国の新聞漫画と比較してユニークな存在である。どのようなニュースが起きようとも、ほぼ毎日必ず最終社会面の左上隅に掲載される4コマ漫画は、日本のほとんどの一般紙にとって「そこになくてはならない」ものであり、多くの読者にとっては読む・見るのが習慣づけられた定番アイテムである。漫画史研究者の清水勲も指摘しているように、「日本の四コマ漫画は新聞を中心に発展してきた」。しかし、その人気・認知度の高さにもかかわらず、新聞4コマ漫画の内容を実証的・体系的に分析した学術研究はきわめて少ない。その政治的内容に光をあてた研究は、なおさら少ない。⁽⁴⁾

本論文は、これまでほとんど研究対象とされてこなかった新聞4コマ漫画に目をむけ、かつ、そのなかで日本の最高政治指導者である内閣総理大臣（以後、首相）がいかに描かれているかを分析することで、上述の疑問の一端を解明しようとする試みである。

より具体的には、麻生太郎首相の在任期間を時間枠として、3大全国紙（『毎日新聞』・『読売新聞』・『朝日新聞』）の社会面に掲載されたすべての4コマ漫画（朝刊・夕刊とも）を精査し、そのなかから首相を描いている作品を網羅的に抽出し、それらが首相をどのように描いているかを主に質的に分析する。

分析時間枠（首相在任期間）は、2008年9月24日～2009年9月16日（358日）で、分析対象とした4コマ漫画の題名・作者名・掲載紙名は、以下のとおりである。*

・「アサッテ君」	東海林さだお	『毎日新聞』（朝刊）
・「ウチの場合は」	森下裕美	『毎日新聞』（夕刊）
・「コボちゃん」	植田まさし	『読売新聞』（朝刊）
・「ののちゃん」	いしいひさいち	『朝日新聞』（朝刊）
・「地球防衛家のヒトビト」	しりあがり寿	『朝日新聞』（夕刊）

* 『読売新聞』の夕刊では、麻生首相の在任期間中、社会面の4コマ漫画は連載されていない。それ以前は、小泉純一郎首相の在任期間中の2004年7月2日号で終了するまで、38年間にわたり「サンワリ君」（鈴木義司）が連載されていた。

分析対象を抽出する上でもっとも重要なのは、「首相を描いている作品」をいかに定義するかであるが、本論文はかなり狭義のそれを採用した。すなわち、「首相を描いている作品」を、次の2つの基準のいずれか、あるいは両方に合致するものに限定した。

- 1) 麻生首相の身体、もしくはその一部を、首相本人であることを判別できる画像として描いている。
- 2) 「麻生」・「首相」・「総理大臣」・「総理」など、文字により直接的に麻生首相に言及している。

上述のような狭義の基準を採用した理由は、首相その人が作品の題材として描かれていることが

疑いようのない事実として客観的に確認できるもののみを扱うことで、分析対象の抽出(同時に分析から得られる知見)の安定性・確実性を最優先させるためである。もちろん、間接的・示唆的、その他の方法で首相を描いている(と思われる)作品は存在するし、それらに分析価値がないというわけではけっしてない。本論文でも、質的な分析をする際には、定義には合致しないものの首相と関連すると考えられる作品を補足的に分析に加える。しかし、類似した先行研究がきわめて限定されている現段階では、できるだけ狭義の定義を採用することで分析対象の抽出の精度を高め、可能なかぎり堅実な知見を示し、今後のさらなる研究につなげることが先決であると判断した。小泉純一郎、および安倍晋三・福田康夫首相を描いた4コマ漫画を分析した先行研究(後注4参照)も、ほぼ同じ定義を採用している。なお、小泉・安倍・福田を事例とした先行研究は本論文にとって最重要、かつほぼ唯一の比較材料であるため、随所で「先行研究」として参照・引用するが、頻繁に言及するためそのつど後注をつけないことを断っておく。

分析にあたっては、これも先行研究にならい、マス・メディアのフレーム(枠組)概念にもとづく分析手法を援用する。ここでいうフレームとは、しばしば引用されるトッド・ギトリン(Todd Gitlin)の定義に従い、「言葉であるか画像であるかを問わず、シンボルの使い手が日常的に言説を構成する際に用いる、認知・解釈・表示の一貫したパターン、また選択・強調・排除の一貫したパターン」をさす。簡潔に言えば、媒体(新聞4コマ漫画)がどのような枠組・とらえ方・観点で対象(首相)を描いているかに着目する質的な分析手法である。ギトリンによれば、あらゆるジャーナリズム活動にとってフレームは不可避・不可欠な存在であり、ゆえにそれを分析するためにはフレームの構造を明らかにする必要がある。(5)

次に、本論文にはいくつか重要な意義があるが、主要なものとして以下の3点をあげることができる。

第1に、新聞の政治漫画を分析した先行研究のほとんどが1コマ漫画のみを対象としてきたのに対し、本論文は4コマ漫画という未開拓に近い領域に踏み込む。既述のとおり、4コマ漫画は日本の新聞界、および漫画界で無視できない人気と地位を誇っている。藤森照信の言葉を借りれば、「マンガファンならずとももっとも多くの人が目を通しているのは新聞四コマ漫画にちがいない。日本のマンガの大通りというか広場にあたる」。にもかかわらず、その内容を学術的に分析しようとする努力はほとんどされてこなかった。たとえば、本論文の冒頭で触れた茨木正治は、政治漫画を理論的、かつ実証的に検討した日本では数少ない研究者であるが、彼の一連の研究は1コマ漫画だけに焦点をあてている。(6)

関連して第2に、ただでさえ少ない新聞4コマ漫画の先行研究のなかでも、政治的な表現内容に着目してそれを実証的・体系的に分析する本論文のような試みは、なおさら希少である。その主因として、ある漫画研究者の言葉を借りれば、一般的に新聞4コマ漫画が「一種の清涼剤[として]読者に息抜きをさせる」ものとし理解されていない点が考えられる。新聞4コマ漫画を質的に分析している若干の既存文献にしても、小泉・安倍・福田の描かれ方を論じた先行研究をほぼ唯一の例外として、政治や政治指導者の描かれ方を研究対象としているわけではない。(7)

なお、例外的に多い「サザエさん」(『夕刊フクニチ』・『新夕刊』を経て『朝日新聞』、長谷川町子)に関する作品論も、本論文のように政治指導者の描き方に注目しているわけではないし、その多くは学術研究というよりは大衆むけの教養・娯楽書である。既述の点とあわせ、本論文には、既存の新聞4コマ漫画研究が見落としてきた領域を新たに開拓する意義がある。(8)

第3に、本論文には政治的コミュニケーション学の観点からも重要な意義を見いだすことができる。画像と文字を組みあわせることのできる漫画表現には、受け手の政治認識に与える影響やジャーナリズムの権力監視・番犬機能という点で、無視できない特性がある。フェルドマン・オフエル(Feldman Ofer)は、「マンガは、現代国家において、政治的コミュニケーションの重要な役割を担っ

ている。これは読者に昨今の政治社会状況を知らしめると同時に、その状況を雄弁に解説し、国内外の事態についての理解に役立っている」と指摘している。前述の茨木も、政治を扱うことで漫画は「読み手である一般庶民に情報を提供し、あわせて政治権力をつかさどる様子を批判的に表して……政治における認識と態度を形成する一助となる」と論じている。より最近では、アメリカ史研究者の金澤宏明が「民衆に対して政治意識を流布し、賛同あるいは批判を促す媒体」としての政治漫画の史料価値を評価している。政治認識を形成する機能や権力監視・番犬機能が1コマ漫画だけに認められて、新聞4コマ漫画に認められないと考える根拠はない。本論文は、新聞4コマ漫画の政治的コミュニケーションとしての機能・性質の理解にも貢献することができる。⁽⁹⁾

本論文の構成についても説明しておく。まず、次項「2 量的な側面から見た全体的な傾向」では、分析期間から抽出した作品群を集計し、量的な側面から全体的な傾向を把握する。それをふまえ、「3 新聞4コマ漫画が描く麻生首相」で作品の質的な内容分析をおこなう。最後の「4 結論分析・知見の総括」では、それまでに得た分析・知見を総括し、先行研究とも比較しながら今後の課題などを提示し、さらに新聞4コマ漫画の権力監視・番犬機能などについて全体を通して得られる若干の考察を示す。

紙幅制限のため、本論文は前編・中編・後編にわけて掲載する。本号掲載の前編では、「2 量的な側面から見た全体的な傾向」までをまとめる。本誌次号(第49巻・第1号)に掲載する予定の中編では、『毎日新聞』の「アサッテ君」(朝刊)と「ウチの場合は」(夕刊)そして『読売新聞』の「コボちゃん」(朝刊)の質的な内容分析をおこなう。さらにその次の号(第49巻・第2号)に掲載する予定の後編では、『朝日新聞』の「ののちゃん」(朝刊)と「地球防衛家のヒトビト」(夕刊)を同じ方法で分析した上で、結論として分析・知見を総括し、今後の研究課題や全体を通して得られる考察を提示する。

最後に、本論文中で言及する人物の役職等はすべて当時のもので、敬称は省略している。

2 量的な側面から見た全体的な傾向

本項では、本論文の主目的である質的な内容分析をおこなう前段階として、麻生首相を描いた新聞4コマ漫画を量的な側面から見ることで、その全体像を俯瞰する。

知見の記述に移る前に、量的なアプローチをとる本項では、前述した「首相を描いている作品」の定義に合致しない作品や在任期間外に掲載された作品は、すべて除外してあることを断っておく。量的な手法を採用するがゆえに、明確な基準で取捨選択をする必要があるからである。もちろん、厳密には定義に合致しなくても、あるいは在任期間外であっても、本論文の趣旨に照らして参照すべき作品はある。それらは、質的な分析をする次項で補足的に扱う。

まず、もっとも基本的な作業として、麻生首相の在任期間中(2008年9月24日～2009年9月16日)各4コマ漫画がどのくらいの頻度(「割合」のこと、以後「頻度」で統一する)と本数で首相を登場させたかを調べたところ、表1のような結果が得られた。

表1 麻生首相を描いた作品の頻度と本数(漫画別)

「アサッテ君」(東海林さだお)	『毎日新聞』(朝刊)	2.39%(335本中8本)
「ウチの場合は」(森下裕美)	『毎日新聞』(夕刊)	0.00%(275本中0本)
「コボちゃん」(植田まさし)	『読売新聞』(朝刊)	0.00%(347本中0本)
「ののちゃん」(いしいひさいち)	『朝日新聞』(朝刊)	0.00%(348本中0本)
「地球防衛家のヒトビト」(しりあがり寿)	『朝日新聞』(夕刊)	4.86%(288本中14本)
合 計		1.38%(1,593本中22本)

3大紙の4コマ漫画の全体的な特徴として、上の結果から少なくとも3つの重要な点を指摘することができる。

第1に、先行研究も指摘しているように、首相を描く漫画と描かない漫画との間に大きなへだたりがある。小泉・安倍・福田の在任期間中、時事性が強い「アサッテ君」と「地球防衛家のヒトビト」は一定の頻度・本数で首相を描いていたが、家庭色が強い「ウチの場合は」・「コボちゃん」・「ののちゃん」はほとんど描いていなかった。この特徴は首相が麻生に交代してからも継続している。

関連して第2に、麻生の在任期間中に限れば、上述のへだたりはより拡大し、完全に分離してしまった。首相を描いているのは、頻度・本数とも多い順に「地球防衛家のヒトビト」と「アサッテ君」で、この順序は先行研究でも同じである。しかし留意すべきは、小泉・安倍・福田の場合、これら2つの漫画だけで首相を描いた作品のすべてを占めていたわけではなかった、ということである。逆にいえば、首相がほとんど登場しない「ウチの場合は」・「コボちゃん」・「ののちゃん」でも、きわめて少数ではあるが小泉・安倍・福田を描く作品は存在した。これら3つの家庭漫画を合計すると、小泉は0.09% (5,167本中5本)、安倍は0.10% (955本中1本)、福田も0.10% (990本中1本) の作品で描かれており、ごく少数とはいえ麻生のように皆無というわけではなかった。首相を描くことに関する時事的な漫画と家庭的な漫画とのかい離は、麻生の任期中にいつそう広がり、完全に二分化してしまったといえる。数字上は微少であるが、この変化には本論文にとって看過できぬ意味がある。⁽¹⁰⁾

第3に、首相を描く漫画と描かない漫画がはっきりわかれた一方で、全体的に見れば前任者3人と比べ麻生はもっとも「描かれやすい」首相であった。在任期間が異なるため頻度のみを比較すると、小泉の0.83%、安倍の1.26%、福田の0.67%に対し、麻生は1.38%と最高値を記録している。これはつまり、「アサッテ君」と「地球防衛家のヒトビト」が前任者よりも頻繁に麻生を描いたということでもある。漫画ごとに各首相を描いた頻度を見ると、「アサッテ君」は小泉 = 0.87%、安倍 = 2.37%、福田 = 0.59%、麻生 = 2.39%、「地球防衛家のヒトビト」は小泉 = 3.10%、安倍 = 3.72%、福田 = 2.72%、麻生 = 4.86%、となる。どちらの漫画でも、麻生の頻度は他の誰よりも高い。参考までに、後続の順序も安倍・小泉・福田で同一である。頻度を基準とした麻生の「描かれやすさ」については、内閣支持率との関係进行分析の際にあらためて言及するし、中編・後編で質的分析をする際にも折に触れて論じる。

次に、同じデータを新聞別、朝・夕刊別に集計したところ、表2と表3のような結果が得られた。

表2 麻生首相を描いた作品の頻度と本数(新聞別)

『毎日新聞』	1.31% (610本中8本)
『読売新聞』	0.00% (347本中0本)
『朝日新聞』	2.20% (636本中14本)

表3 麻生首相を描いた作品の頻度と本数(朝・夕刊別)

朝刊	0.78% (1,030本中8本)
夕刊	2.49% (563本中14本)

これらの結果も基本的には先行研究のそれと同じで、新聞別では『朝日新聞』・『毎日新聞』・『読売新聞』の順で多く、また朝刊よりも夕刊の漫画がより頻繁に首相を描いている。ただし、前述のとおり麻生を描いているのは「アサッテ君」と「地球防衛家のヒトビト」だけであるから、新聞別、朝・夕刊別による差は両漫画の数値をほぼそのまま反映しているにすぎない。首相を描く漫画と描かない漫画が完全に分離しているだけに、新聞別、朝・夕刊別の比較だけを見て解釈を加える

ことには慎重にならざるをえない。したがって、とくに麻生の場合は、異なる漫画を横断的にまとめて全体的な傾向を把握する一方で、漫画ごとにその特質や傾向を詳しく検討することが重要となる。本論文が質的分析に主軸を置くのはそのためである。

次に、首相を描いた作品数と内閣の平均支持率を、在任期間を前半と後半にわけて比較したところ、表4のような結果が得られた。2008年9月から翌年9月までが在任期間であるため、前半は2008年9月から翌年2月まで、後半は2009年3月から同年9月までとした。

表4 麻生首相を描いた作品数と内閣の平均支持率*

前半（2008年9月～2009年2月）	12本	30.3%
後半（2009年3月～2009年9月）	10本	20.8%

*前半・後半の平均支持率は、表5の月別の支持率から算出した。

支持率が比較的に高い前半にやや多く描かれており、そこだけを見ると、支持率が低下した後半に多く描かれた安倍・福田よりも、高支持率を維持した就任初年にもっとも頻繁に描かれ、その後も一定数の作品で描かれつづけた小泉に似ているかのように映る。

しかし、より詳しく分析するために作品数と内閣支持率を月ごとに集計すると、前任者の誰とも異なる特徴が見えてくる。表5がその結果である。

表5 麻生首相を描いた作品数と内閣の平均支持率（月別）*

	支持率	合 計	「アサッテ君」	「地球防衛家のヒトビト」
2008年9月	48%	0	0	0
10月	42%	1	0	1
11月	37%	6	4	2
12月	22%	2	0	2
2009年1月	19%	1	0	1
2月	14%	2	1	1
3月	18%	1	0	1
4月	26%	1	1	0
5月	27%	1	0	1
6月	19%	2	1	1
7月	19%	5	1	4
8月	19%	0	0	0
9月	18%†	0	0	0

*内閣の月別の支持率は朝日新聞社の世論調査から算出した。同じ月に2回以上おこなわれている場合は、それらの平均値を算出し、小数点以下は四捨五入した。

†2009年9月の支持率は、麻生政権中に連立して内閣を運営していた自民党と公明党の政党支持率、それぞれ15%と3%（「あなたはいま、どの政党を支持していますか」という質問に対して「自民党」・「公明党」と回答した割合）を合計した数値をあてた。同月16～17日に実施された緊急RDD調査に、麻生内閣の支持・不支持を問う質問がなかったためである（鳩山由紀夫が首相に就任したことによる）。

まず、麻生は支持率の低下と低迷にともない比較的にまんべんなく描かれており、少なくとも高支持率時に多く描かれた小泉とは異質である。麻生内閣の支持率は就任以降、前半は連続的に下落し、後半に入ってから一時期の回復後すぐに下降し低迷をつづけたが、その間、途切れることなくほぼ毎月、首相を描いた作品がある。前半・後半で二分すると前半の平均支持率のほうが高くな

るが、その実は、在任期間を通じて支持率は下降、もしくは低迷しつづけていたのである。したがって、小泉のように支持率が高いときに多く描かれたとはいえず、むしろ、徐々に支持率を失い、低空飛行をつづけるなかで、在任期間中を通じて平均的・継続的に描かれたというべきである。

さらに、支持率の低下・低迷とともに麻生が継続して描かれたことは、安倍・福田とも明らかに異なる。安倍・福田の場合、支持率を失いつづけた点では麻生と共通するが、その間に安定した頻度で描かれることはなかった。そして2人とも、突然の辞任表明後に描かれる機会が急増していた。安倍は2007年9月12日に辞任を表明したが、同じ月に7本の作品で描かれている。これは、安倍を描いた全作品20本の約3分の1にあたり、その7本のうち6本は明確に安倍の進退を主題としていた。福田の場合、その現象はより顕著で、2008年9月1日に辞任を表明したのち、立てつづけに6本の作品で描かれている。福田を描いた全作品11本の半数以上が辞任表明後に集まっており、しかも、そのすべてが辞任に関連する内容である。このように、安倍・福田は描かれる時期に極端な偏りがあったが、麻生は在任期間中を通じて偏りなく分散して描かれている。

他方、前任者3人と麻生に共通して認められる特徴もある。それは、首相が描かれる多寡に影響を与えるのは支持率の数字そのものよりも、どれだけ社会の注目を浴びているかである、という仮説があてはまることである。先行研究が示したこの仮説は、本論文の知見と照らしても整合性がある。たとえば、表5で目立つのは2008年11月(6本)と翌年7月(5本)であるが、いずれの場合もそのとき社会で耳目を集めていた話題が作品の背景にある。つまり、2008年11月の6本中5本は首相の高級パー通いと漢字の誤読(残る1本は生活支援定額給付金)そして2009年7月の5本はすべて衆議院の解散・総選挙をめぐる首相への批判の高まりを背景としている。確かに、どの題材も支持率の低下・低迷と無関係とはいえない。しかし、それらが支持率を失わせただけに首相が作品化されたというよりは、マス・メディアで大きく取りあげられるなど話題性があったため、4コマ漫画で描かれたと考えるのが自然であろう。

上の仮説は、特定の月や作品に限らず在任期間全体を見渡した場合でも、麻生の「描かれやすさ」を説明する上で十分な妥当性を有しているといえる。自身の言動がくり返し不評を買ったこと、かつその言動が一因となり人気低下に歯止めがかからなかったこと、この2つがかさなったことで社会的注目度が増し、前任者の誰よりも「描かれやすい」首相になった、と考えられるからである。表5を見ると、麻生内閣の支持率は最高値(48%、2008年9月)で小泉・安倍・福田のそれに及ばず、最低値(14%、2009年2月の平均値)では前任者の誰よりも下回っている。つまり、内閣支持率を基準とすれば、麻生は前任者の誰よりも不人気の首相であった。にもかかわらず、もっとも頻繁に描かれている。一見、矛盾するようであるが、先行研究が示す仮説なら合理的に説明できる。自身の言動がマス・メディアなどで大きく報道され、不人気でありつづけたがゆえの作品の多さと考えられるからである。「麻生太郎さんにこのまま続けてもらった方が漫画を描くにはありがたい」。本論文の冒頭で引用したやくみつる(漫画家)の指摘も、麻生が作品に取りあげやすいような、社会の注目を集める話題を多く提供した首相であったことを物語っている。もちろん、やくがのべているように麻生が後任の鳩山由紀夫よりも「描きやすい」首相であったかどうかは、本論文では確かめることができない。今後の研究で実証的に突きとめる必要がある。

ただし、社会的注目度を重視する上述の仮説も万能とはいえない。表1を分析した際に指摘したように、「ウチの場合は」・「コボちゃん」・「ののちゃん」は1度も首相を描いていない。少なくとも麻生の在任期間中に限れば、仮説は時事的な「アサッテ君」と「地球防衛家のヒトビト」にはうまくあてはまっても、家庭的な漫画には必ずしも適合しないことになる。さらに、衆議院総選挙が実施された2009年8月以降(18日公示、30日執行)首相が1度も描かれていないことも説明しにくい。この選挙では自民党が大敗、民主党が躍進し、日本ではじめて総選挙による政権交代が実現

した。本論文の分析期間中もっとも社会の注目を集め、かつ議論を喚起した出来事の1つであり、この前後にこそ多くの作品で首相が描かれてもおかしくなかった。しかし、実際にはそうはならなかった。支持率や社会的注目度と「描かれやすさ」の関係の理論化をすすめるためには、今後も継続的に研究を積みかさねていく必要がある。

最後に、麻生首相を示すシンボル(画像・文字・画像と文字)を漫画ごとに分類し集計したところ、表6のような結果が得られた。

表6 麻生首相を示すシンボル(漫画別)

	画像のみ	文字のみ	画像と文字(併用)
「アサッテ君」	3本	2本	3本
「ウチの場合は」	0本	0本	0本
「コボちゃん」	0本	0本	0本
「ののちゃん」	0本	0本	0本
「地球防衛家のヒトビト」	4本	3本	7本
合 計	7本	5本	10本

画像の使用がやや多いが、シンボルの偏りはあまりない。画像が若干多い点については、先行研究も指摘しているように、漫画という表現形態を考えれば文字を上回ること自体に不自然さはない。前任者3人と比較すると、文字で描かれることの多かった小泉(画像のみ=27本、文字のみ=39本、併用=14本)よりも、さほど大きな偏りのなかった安倍(画像のみ=8本、文字のみ=5本、併用=7本)と福田(画像のみ=3本、文字のみ=3本、併用=5本)に近いといえる。ただし、小泉のシンボル内訳は、14本中13本と文字のみで描くことが極端に多かった「サンワリ君」(『読売新聞』夕刊、鈴木義司、2004年7月に連載停止)に大きく影響されている。「サンワリ君」を除外すれば、小泉から麻生まで首相の描写シンボルに大きな偏りはあらわれない。個別の4コマ漫画を見ても、首相によりシンボルの使い方を大きく変化させている漫画はない。

しかし、新聞4コマ漫画のシンボル使用についてはなお不明な点が多く、より蓋然性の高い知見を得るには追加的な研究を要する。「サンワリ君」が文字をとくに多用していたにせよ、小泉の先行研究が指摘しているように、4コマ漫画では政治家本人が主人公になりにくいため文字により説明的に首相を描く必要性が高まる、とも考えられる。麻生を描いた作品を見ても、もっとも多いのは画像と文字の併用(10本)で、文字の役割が軽いわけではけっしてない。文字だけを使った作品も5本ある。容姿など身体的・外見的な描きやすさも含め、さらなる研究でシンボル使用の傾向を説明づける要因をできるだけ多く見いだす必要がある。

- (1) やくみつる「こんな自民に誰がした 資質落ち政治ネタ『バブル』」『朝日新聞』2009年7月19日。
- (2) 茨木正治『メディアのなかのマンガ 新聞一コママンガの世界』(臨川書店、2007年) 16。
- (3) 新聞漫画を含め、アメリカ・ジャーナリズム史を要領よく概説した研究書として、Edwin Emery and Michael Emery with Nancy L. Roberts, *The Press and America: An Interpretive History of the Mass Media* 9th ed., (Needham Heights, MA: Allyn and Bacon, 2000)がある。日本における新聞漫画の歴史を概説した主要な文献としては、川崎市市民ミュージアム編『日本の漫画300年』(川崎市市民ミュージアム、1996年) 清水勲『図解 漫画の歴史』(河出書房新社、1999年) ニュースパーク(日本新聞博物館)編・春原昭彦監修『新聞漫画の眼 人 政治 社会』(ニュースパーク、2003年) 清水勲『四コマ漫画 北斎から「萌え」まで』(岩波新書、2009年) などがある。
- (4) 清水勲『四コマ漫画 北斎から「萌え」まで』(岩波新書、2009年) 180。新聞4コマ漫画の政治的内容を学術的な方法で検討した数少ない先行研究として、小泉純一郎、および安倍晋三・福田康夫首相を事例とした一

連の論文がある。

小泉に関する論文は、新庄彩子・水野剛也ほか「新聞4コマ漫画が描く小泉劇場 小泉純一郎首相在任期間中の3大紙の4コマ漫画に関する一分析 2001～2006(前編)」『情報研究』第37号(2007年7月):47～84、新庄彩子・水野剛也ほか「新聞4コマ漫画が描く小泉劇場 小泉純一郎首相在任期間中の3大紙の4コマ漫画に関する一分析 2001～2006(後編)」『情報研究』第38号(2008年1月):23～58、である。なお、水野剛也「漫画のなかの小泉純一郎首相 首相在任期間中の『朝日新聞』4コマ漫画を中心として」『朝日総研レポート(AIR21)』第206号(2007年7月):16～53は、上述の論文から『朝日新聞』の4コマ漫画の分析部分を抜粋したダイジェスト版である。

安倍・福田に関する論文は、水野剛也・福田朋実「新聞4コマ漫画が描く安倍晋三・福田康夫首相(前編) 両首相在任期間中の3大紙の4コマ漫画に関する一分析 2006～2008」『社会学部紀要』第47巻・第1号(2010年1月):5～13、水野剛也・福田朋実「新聞4コマ漫画が描く安倍晋三・福田康夫首相(中編) 両首相在任期間中の3大紙の4コマ漫画に関する一分析 2006～2008」『社会学部紀要』第47巻・第2号(2010年3月):21～34、水野剛也・福田朋実「新聞4コマ漫画が描く安倍晋三・福田康夫首相(後編) 両首相在任期間中の3大紙の4コマ漫画に関する一分析 2006～2008」『社会学部紀要』第48巻・第1号(2010年12月):61～78、である。

(5) Todd Gitlin, *The Whole World is Watching: Mass Media in the Making and Unmaking of the New Left* (Berkeley and Los Angeles, CA: University of California Press, 1980), 7. フレーム概念を政治漫画分析に関連づけて概説した先行研究として、茨木正治『「政治漫画」の政治分析』(芦書房、1997年)、茨木正治「政治漫画に見る内閣 選挙報道における森喜朗内閣と小泉純一郎内閣」『北陸法學』第9巻・第2号(2001年):29～50、などがある。ニュースのフレームについては、Gaye Tuchman, *Making News: A Study in the Construction of Reality* (New York: Free Press, 1978)なども参考になる。

(6) 藤森照信「今週の本棚 紙面左上に君臨する『政権』の起承転結」『毎日新聞』2009年11月15日。もちろん、新聞の1コマ漫画はまさに政治・政治家を批評・風刺することを主目的としており、それゆえに先行研究が1コマ漫画を優先してきたことには十分な根拠がある。

(7) 山口佐栄子「4コマ漫画」、夏目房之助・竹内オサム編・著『マンガ学入門』(ミネルヴァ書房、2009年) 8。新聞4コマ漫画を質的に分析している文献として、次のようなものがある。高坂文雄『笑う戦後史』(トランスビュー、2002年)、岩本茂樹『戦後アメリカニゼーションの原風景 『ブロンディ』と投影されたアメリカ像』(ハーベスト社、2002年)、岩本茂樹『憧れのブロンディ 戦後日本のアメリカニゼーション』(新曜社、2007年)、岩本茂樹『アメリカ漫画『ブロンディ』へのまなざし 『夫の家事労働』をめぐって』『メディア・コミュニケーション』第58号(2008年3月):43～53。

(8) 長谷川町子の「サザエさん」は、1946年4月に『夕刊フクニチ』で連載を開始し、『新夕刊』を経て1949年12月から『朝日新聞』(夕刊) 1951年4月から1974年2月まで『朝日新聞』(朝刊)で連載された4コマ漫画であるが、新聞にとどまらず、映画・ラジオ・アニメ・テレビドラマなど、さまざまなメディアを通して広く親しまれた。そのためか、「サザエさん」を論じた文献は他の漫画のそれに比べて格段に多い。主要な文献として、次のようなものがある。東京サザエさん学会編『磯野家の謎』(飛鳥新社、1992年)、樋口恵子『サザエさんからいじわるばあさんへ 女・子どもの生活史』(ドメス出版、1993年)、新藤謙『サザエさんとその時代』(晩聲社、1996年)、清水勲『サザエさんの正体』(平凡社、1997年)、清水勲『古きよきサザエさんの世界』(いそづぶ社、2002年)、朝日新聞be編集部編『サザエさんをさがして』(朝日新聞社、2005年)、朝日新聞be編集グループ編『サザエさんをさがして その2』(朝日新聞社、2006年)、鶴見俊輔・齋藤慎爾編『サザエさんの 昭和』(柏書房、2006年)、朝日新聞be編集グループ編『またまたサザエさんをさがして』(朝日新聞社、2007年)、朝日新聞be編集グループ編『サザエさんパンダを見に行く サザエさんをさがして その4』(朝日新聞社、2009年)、朝日新聞be編集グループ編『原っぱで夕焼けを見ていた頃 サザエさんをさがして その5』(朝日新聞社、2010年)。

(9) フェルドマン・オフエル「政治マンガに見る『日本の首相』」『潮』1993年12月号:120、茨木『「政治漫画」の政治分析』190、金澤宏明「史料としての合衆国の政治カートゥーン アメリカ対外関係系研究と図像分析」『アメリカ史研究』第32号(2009年):126。

(10) これらの漫画以外にも、小泉は「まっぴら君」(『毎日新聞』夕刊、加藤芳郎)「サンワリ君」(『読売新聞』夕刊、鈴木義司)「ワガハイ」(『朝日新聞』夕刊、砂川しげひさ)で描かれている。しかし、そのいずれも小泉の在任期間中に連載を停止しているため、安倍・福田・麻生を描いた作品はない。

【Abstract】

Prime Minister Taro Aso
in Newspaper Comic Strips (Part 1):

An Analysis of Comic Strips in the Three Major National Newspapers in Japan
2008-2009

Takeya Mizuno, Tomomi Fukuda,
Juri Kinomura, Toshiyuki Shiga,
Omoi Sugawara, and Kazuki Chida

This research attempts to analyze qualitatively (and partly quantitatively) how comic strips of the three major national newspapers in Japan, *Mainichi*, *Yomiuri*, and *Asahi*, both in morning and in evening editions, portrayed Prime Minister Taro Aso during his tenure, from September 24, 2008 to September 16, 2009.

As the first installment of a three-part series, this article (Part 1) explains the purpose, method, and significance of the research, and then highlights quantitative findings.

The second and third installments (Parts 2 and 3) will appear in upcoming issues, in which comic strips of *Mainichi*, *Yomiuri* and *Asahi* will be analyzed qualitatively, and conclusions will be presented.